

明石が生んだ日本人作曲家の大長老

菅原明朗

「明朗の世界」

没後30年記念演奏会

印田千裕：ヴァイオリン 印田陽介：チェロ 澤田まゆみ：ピアノ

明石フィルハーモニー弦楽四重奏団 明石フィルハーモニー・ジュニア・オーケストラ



スカルラッチェアーナより第2楽章 Allegretto

弦楽四重奏曲「神曲」

《三つの断章》～無伴奏ヴァイオリンのための～

ブルゴーニュ I

白鳳之歌 III 水煙

無伴奏セロ・ソナタ

2018.8.4 Sat 開演 16:00 (開場 15:30)

子午線ホール アスピア明石北館9階

チケット - TICKET - ※2018.6.2 Sat 発売開始

一般 2,000円 高校生以下 1,000円

取扱い

e+(イープラス) <http://eplus.jp>

(公財)明石文化芸術創生財団 (078-918-5085)

アワーズホール・明石市立市民会館

明石市立西部市民会館 明石観光案内所

e+チケット購入ページ



菅原明朗 Meirou SUGAHARA (1897 - 1988)

明石市大蔵町出身。生まれは天文科学館の真南、子午線直下。現在の人丸小学校(当時明石第二尋常小学校)、明石小学校(当時赤石尋常高等小学校)出身で高等小学校卒業までを明石で過ごした。1914年に上京し、川端画学校に入学して、藤島武二に師事して洋画を学びながら音楽も独学で学んだ。山田耕筰、信時潔らの次の世代にあたる作曲家で、ドイツ音楽が主流だった時代にフランス音楽の導入と紹介に尽力した。また、日本で初めての作曲科の教授を務め、数多くの優秀な弟子を育てた。作曲、編曲は400曲を超え、交響曲、協奏曲、レクイエムなど本格的なものも多数。作曲家深井史郎は、「菅原明朗の前の世代の山田耕筰、信時潔は器楽的な技術を第二次的なものとしてしか身につけていなかった。菅原明朗は歌曲の分野からもう一步前進して、器楽曲、オーケストラ曲の分野を切り開いた。」と言う。日本の本格的なクラシック作曲家は菅原明朗から始まったと言える。幅広い知識と教養を持った人物であった。没後、お墓は菅原家代々の菩提寺である明石市大蔵町の西林寺にある。

演奏者 - players -

澤田 まゆみ *Piano*

群馬県高崎市出身。15歳の時、自作のコンチェルトを群馬交響楽団と共演、好評を博す。東京藝術大学及びドイツ・リュベック音楽大学卒業し、東京藝術大学大学院修了。パリにてショパン没後150年記念リサイタル他各地の音楽祭で演奏。第4回上毛芸術文化賞を受賞。ドイツ、韓国、日本において新作初演に携わった。新島学園短期大学教授。高崎経済大学附属高等学校芸術コース講師。(公社)日本演奏連盟会員。

印田 千裕 *Violin*

3歳よりスズキ・メソッドでヴァイオリンを始める。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学音楽学部卒業。英国王立音楽院演奏家ディプロマコース修了。ノヴォシビルスク・ヤングヴァイオリニスト国際コンクール・ジュニア部門第3位、江藤俊成ヴァイオリンコンクール第1位。帰国後も国内外のオーケストラと協奏曲の共演、NHK-FM名曲リサイタルに出演するなど幅広く演奏活動を展開している。

印田 陽介 *Cello*

東京藝術大学附属音楽高等学校を経て、同大学音楽学部卒業後、チェコ・プラハ音楽院に留学、更なる研鑽を積んだ。チェコ・ドヴォルザークホールにてトマーシュ・ヤムニーク氏とヴィヴァルディの二重協奏曲を共演するなど、ソリストとして活動するほか各種室内楽、オーケストラ等、幅広く活動している。蓼科音楽コンクールin東京・室内楽部門第1位、ユースプラハ国際音楽コンクール・弦楽アンサンブル部門金賞ほか多数受賞。

Quartet 明石フィルハーモニー弦楽四重奏団

明石フィルハーモニー管弦楽団は、明石を中心とした地域の音楽文化の発展に寄与するオーケストラ。2006年10月に設立。愛称は、『たこフィル』。今回はそのトレーナーや演奏委員らによる特別編成の弦楽四重奏。



杉山 雄一(Va) Yuichi SUGIYAMA
 蔭山 真理子(Vn) Mariko KAGEYAMA
 上塚 憲一(Vc) Ken-ichi KAMIZUKA
 三浦 裕梨香(Vn) Yurika MIURA



明石フィルハーモニー・ジュニア・オーケストラ

次世代の音楽の担い手の育成を目的とし、2009年6月に明石フィルハーモニー管弦楽団(たこフィル)の「ジュニア・オーケストラ」として設立。小学生から高校生でなる弦楽オーケストラ。メンバーは明石を中心に神戸や姫路などから参加し、現在は、総勢30余名。質の高いオーケストラを目指しプロの音楽家の指導のもと、日曜日の午前中に練習を重ねている。

— 曲目紹介 - Music Introduction -

スカララッティアーナより第2楽章 Allegretto

菅原明朗はバロック音楽に多くの関心を持っていた。この曲の作曲年代は記されていないが自筆譜の筆跡から1950年代から1960年代に書かれたと思われる。演奏された記録はなく、今回が世界で初めての演奏になるだろう。

弦楽四重奏曲「神曲」

1978年明朗81歳の時の作品。晩年の傑作。一般的なクラシック音楽に慣れた耳には不思議な響きかもしれない。それは明朗の研究していたグレゴリオ聖歌の影響によるものだろう。この味わい深い傑作を明石フィルハーモニー弦楽四重奏団による円熟の演奏でお届けする。

《三つの断章》～無伴奏ヴァイオリンのための～

1977年3月28日に開かれた「菅原明朗80歳記念コンサート」で、広瀬悦子の独奏によって初演された。第1の断章は茫洋とした前奏曲的性質を帯びている。様々に按配された断片的な旋律が数珠繋ぎになってきている。ドの音で結ぶ。第2の断章はバロック風の舞曲である。自由な変拍子で気紛れに推移し、レの音で結ぶ。第3の断章はモテラート。冒頭に現れる古風なコラル風のメロディーと、それを受ける上行的で力強いメロディとを繰り返してゆく。ソの音で結ぶ。

ブルゴーニュ I

3つの小品からなり、それぞれに1969年に訪ねたブルゴーニュ地方の街の名前が付けられている。第1曲〈ヴェズレー〉はモテラート、四分の五拍子で心地よく流れていくが、重音や平行進行を用いた響きの展開をほさむ。第2曲は修道院で有名な〈クリュニー〉。Ampio(たっぷり)の指示によりフォルテのオクターブで開始された後、聖歌のような響きと半音階的手法でまとめられている。第3曲〈オータン〉はヴィヴァーチェ、八分の六拍子で随所に八分の九拍子を織り交ぜながら軽妙かつ流れのある作品である。

白鳳之歌 III 水煙

1933年に鎌倉で完成された菅原の代表作。奈良の薬師寺、東塔の上層部(相輪)の上部にある水煙が題材となっており、16分音符を分散させ常に動く左手に、様々なリズムを組み合わせた右手がその複雑で意味ある装飾を描き出している。この「動」の部分と、非常にやさしく歌われる「静」の部分の対比が美しい。

無伴奏セロ・ソナタ

1955年は、放送局が日本のクラシック音楽作曲家に新作を委嘱して放送番組を通じて世界初演を行うことが熱心に行われた時代である。この曲は、菅原明朗と関係の深かった北海道放送が1962年の第10回民放祭への参加音楽番組のために委嘱した作品で、マレシャルやカサドの弟子の吉田貴壽によって放送により初演され、民放祭で銀賞を得た。

アクセス
Access

子午線ホールアスピア明石北館9階
JR「明石駅」または山陽電鉄「山陽明石駅」から徒歩3分